

神のわざが現れるため

稲山聖修

奨励者紹介[いなやま・きよのぶ]

日本キリスト教団泉北ニュータウン教会牧師
社会福祉法人地球の園 こひつじ保育園理事長

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」

(ヨハネによる福音書 9章1―5節)

皆さん、こんばんは。私は一昨年まで梅花女子大学で教員として勤務しておりました。現在ご紹介にあったところに奉職しております。異動の理由は、お招きが大学教員時代の私を昼夜分かたずお祈りくださった教会からであったこと、そして教会の特徴が福祉、とくに保育園を土台に据えていたところがありました。

もちろんこの結論に至るまでには実にさまざまな道筋があります。この夕べにお集まりの皆さんにお話したいのは、次のことです。一昨年までの勤務先で、詩人であり現在セルビアのベオグラード大学で勤務されている山崎佳代子先生との出会いを与えられました。

山崎先生は、1979年に北海道大学文学部露文科を卒業された後、ユーゴスラビア政府交換留学生としてサラエボ大学に留学、ユーゴスラビア文学史を学ばれ、81年には現在のスロベニア共和国のスロベニア科学芸術アカデミーで比較民謡学を専攻、その後ベオグラード大学文学部大学院でセルビア＝クロアチア語圏の口承文芸を研究、85年から東洋学科日本学専攻課程で働かれているという異色の経歴をおもちです。たまたま2011年の12月に来日帰国されるとの知らせがあり、クリスマス礼拝の講師をお願いしたところ快諾を賜り、お話しする機会を授かりました。その際、山崎先生が大学でのお働きの一方で、詩の朗読を通してユーゴスラビア内戦で傷ついた人々を癒すワークショップを行う、あるいは1999年のコソボ紛争をめぐってNATO軍がベオグラードを空襲した際に、怯える学生と詩の朗読を通じ互いに励まし合ったエピソードに触れて、山崎先生のお人柄を拝察し、感銘を覚えました。そして、翌年の夏に幸いにも私が無教会の歩みをテーマとして講演と討議への参加を依頼され、ベオグラード大学を訪ね、かの地の教員や学生の方々との交わりを深めたことも影響しています。

さて、ベオグラードへの渡航には、トルコ航空を用いイスタンブール国際空港経由でベオグラード国際空港に到着する航路を選びました。一般的には、目的地の空港に降り立ち施設の外に出ますと排気ガスやさまざまな喧噪に出会うのかもしれませんが。けれどもベオグラード空港の施設では、都会の喧噪ではな

く、よく耕された畑の土の香りに包まれました。航空便の到着を伝える掲示板もLEDではなく、板がパタパタ回転する奥ゆかしいもの。宿は、旧社会主義諸国の様式を留める簡素なホテル。バスタブの栓は、フロントで借りるゴルフボールのようなゴムボール。会場となる大学への道すがら、実に多彩な美術館や博物館があり、近くにはオスマン・トルコ帝国に対する最前線基地ともなったカレメグダン要塞跡、その下に流れるドナウ川とサヴァ川の合流点の不思議な水の流れ。通貨セルビア・ディナールは国際通貨には換金できませんが、道行く人々は決して無表情ではなく、人生を豊かに楽しんでいるように見えました。

けれども、大学のある旧市街からドナウ川を越えてベオグラード新市街に入りますと、至るところに空襲の傷跡が遺っています。コンボ紛争時にトマホーク・ミサイルが撃ち込まれた建物は、解体されることもなくその姿を留めています。世界遺産として遺されているのではなく、予算が立たず解体する目途が立たないのです。広島原爆ドームのようなオフィス街の廃墟が1km近くも解体されもせず建ち並んでいる通りは、いつしか空爆通りと呼ばれるようになりました。私は、半ば物見遊山の態度の甘さに冷や水を浴びせられた気がした思いや、何と浅はかだったのだろうという思いが胃から込みあげてまいりました。新市街には高層住宅街も集中しています。そこにミサイルが撃ち込まれました。道行く人々の笑顔、とりわけ私と同年代から上の世代の人々の暮らしには、戦時下を過ごした人としての、現代日本人の想像の域を超える悲しみと隣り合わせであったことに気づかされたのです。報道ではNATOは人を狙っていない、あくまでインフラ破壊に目的を留めていると主張していました。しかし、3・11の震災や現在進行中の熊本・大分の震災を知る者には、電気や水道、ガスが止まってしまうことが、病人や高齢者、子どもたち、手術中の患者や人工透析が必要な人には何を意味するのかが分かります。

山崎先生は、ユーゴスラビア内戦を経た人々の言葉をまとめた『解体ユーゴスラビア』という書物を朝日新聞社から出版しています。その中に次のような言葉が出てまいります。1975年生まれ、ベオグラード在住で当時学生だった女性は次のように語ります。「私の家族は、ほんとうに、いろいろ交ざっているんです。父はモンテネグロ人です。母はクロアチア人ということになっていますが、母の家系は純粋のクロアチア人ではないのです。母の父はスロベニア人とハンガリー人の混血で、母の母はクロアチア人とスロバキア人の混血です。ですから、私の体には、いくつもの民族の血が流れているんです。（中略）たとえば、私の生まれたオシエクのあたりは、クロアチア人やセルビア人以外にも、ハンガリー人あり、フォルクス・ドイツと呼ばれる、その土地に代々住んでいたドイツ人あり、スロバキア人ありで、いろいろ交ざりあった地域といえますが、いい隣人関係が伝統的にありました。民族にかかわらず、いい人間関係があったのです。それが、戦後の植民政策によって外部から入ってきた人々の手で壊されていった場合が多いんです。（中略）私たちの世代は、ユーゴスラビアのロスト・ジェネレーションです。なぜかという、私たちの世代ほど、戦後の政権に多くを約束されていた世代はありません。子供時代と青春時代に、未来を約束されて生きてきたのです。でも、それが、党が解体して、こうして国自体が減びていくなかで、私たちのジェネレーションは、絶望するほか、なすすべがないんです。教育は受けた、学校は終わった、仕事はない、内戦がはじまる……。絶望だけです。この状況下で、私たちの世代の仲間の多くが民族主義的な傾向の政党を支持したりするようになりました。（中略）ほんとうですよ。彼らの気持ちはわかります。裏切られたという絶望感から、民族主義に走るという単純なことなのです。でも、私は、そんな仲間をなるべく避ける

ようにしています。彼らと話をしても、議論をしても仕方がないんです。とても悲しいけど」(山崎佳代子『解体ユーゴスラビア』朝日選書476 朝日新聞社1993 139—147頁)。

引用が長くなりましたが、私がここで申しあげたかったことは、ここにお集まりの方々は戦後のお生まれでしょうが、ベオグラードの街で会う人は、私と同じ年齢であっても「戦時下」を生き抜いた人々、しかも民族浄化(エスニッククレンジング)と1999年のNATO軍の劣化ウラン製ミサイルで深く傷を負いながら、歌と文学、祈りと詩、言葉を通して励ましを受けてきた人々だったのです。課題であった発表が終わった後に、山奥のセルビア正教の女子修道院を訪ね、公園で昼食をとっておりましたら、突如アコーディオンを持ったお爺さんがやって来て、一緒に踊ろうと声をかけられました。お金を取られるのではないかと一瞬勘ぐった自分がとても恥ずかしくなりました。まごころから一緒に踊ろうと、みんな手をつないで輪になって踊ります。詩の朗読や素朴な踊りや歌が、人々の痛みを癒す目の前での出来事。もちろんそのような美しい面ばかりではなくて、「サッカーの試合が始まると暴動が起こりますから宿に戻ってください」と呼びかけられたり、帰途のバスが追い越し車線で立ち往生、私を含む乗客が路肩まで押していったりというような珍事もありましたが、それは別段どうということはありません。むしろ手練手管ばかりが重宝されがちな当時の私の日常の中で、「戦争体験者」となる同年代の研究者の方々と親睦を深め、聖書を解き明かすということはどういうことなのか、神学するとはどういうことなのか、御言葉に癒しの力があるとはどういうことなのか、との初心を問われ、重い宿題を背中に、神学研鑽の中で帰国後悶えていたのは確かです。

私の現在の主たる勤務先であります泉北ニュータウン教会では、創立者がチェコの神学者フロマートカの警咳(けいがい)に接しており、社会福祉法人地球の園という福祉法人を母体になっています。具体的には、教会と保育園が車の両輪の関係にありますから、さまざまな立場のご家庭からのお子さんが集まってまいります。国籍も一様ではありません。言葉や身体に特性をおもちのお子さんもお見えになります。実に残念ですが、目下の日本社会は、福祉行政に関しては対応が手厚いとは申しあげられません。その状況の中で奮闘される職員の先生方がおられます。神学の研鑽、教会での働き、そして保育園。どうしてこんなことに、との戸惑いや壁を前に身動きがとれなくなることも決して少なくはありません。その度に励ましを覚える聖書の箇所を、この夕べに皆さんと分かち合いたく存じます。

今夕の聖書箇所、主イエスは、生まれつき目の見えない人を見かけられました。弟子たちがイエスに、ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからか、本人かそれとも両親か、と問います。実に、個人の力ではどうしようもないことが世の中には数多あります。そのどうしようもなさの中で身悶えする他ないその原因を、弟子たちは本人の罪、あるいは両親の罪という言葉でもって説明を求めたのかもしれませんが。その問いが切実なものか、それとも興味本位で単なる因果応報の説明を求めたものかは分かりません。しかし少なくとも、弟子の問い質しの関心を満たす他に力の無い言葉でもって答えるためには、疑問に応じる者はイエスでなくても別段構わなかったはずです。

それでは、この問答が弟子たちの関心を満たすに足るものであったとして、この目の見えない人はどうなるのでしょうか。現状は何も変わらず、放置されたままで終わってしまいます。けれども主イエスが語るには、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである」。そして盲人を癒し、目を開きます。ヨハネによる福音書のこの物語は、盲人の目が開かれたと

ころでハッピーエンドを迎えるお話ではありません。この出来事の後、さまざまな混乱と課題が浮き彫りにされる展開となります。けれどもそれは、神の眼差しに包まれ映った事柄ではなかったのでしょうか。今は隠されているけれども、必ず神のわざは現れるという確信が描かれているように思えてなりません。傷つき、悲しむ人は必ず癒されるとの確信です。困難な世にあってなおも、私たちは世界の人々の交わりの中で育まれ、活かされ、用いられるという、この素晴らしい事実から心から感謝したいと願います。

参考文献

山崎佳代子著『解体ユーゴスラビア』朝日選書476 朝日新聞社 1993

山崎佳代子著『みをはやみ』書肆山田 2010

山崎佳代子著『ベオグラード日誌』書肆山田 2014

2016年5月24日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録